

各地よりのたより

紀伊支部通信

1) 四月例会 學年始め、その他一同多忙のため中止。

五月より舊本會員島田晋村氏再び復活入會せられ、又、新に縣廳に勤めてゐられる木村直樹君入會せられ、本協會員は増加、非常に力強くなつた。島田氏は縣下に於ける天文界の草分けで古顔、阪田氏と共にリ1ダ1であり、木村君は新鋭にて、將來實地觀測に専念せられる由。

2) 五月例会 五月十一日20時より野村方にて今夏の講習會開催(別項参照)に關して打合會として開催した。阪田、島田、木村、野村、橋、それに高商の新谷君を加へて、打合せを終つた。終了24時。

3) 六月例会 第二回打合會を兼ねて、六月上旬開催豫定。

(五月12日、和陸赤院にて 野村記)

編輯局より

本誌は、第18巻の初め(第199號)から、天象欄の報告を、一ヶ月づつ進めて例へば、一月號に2月の天象を、二月號に3月の天象を……といふ風な載せ方をして來ました。之れは、會の創立以來、だんだん海外の遠い地方にも會員が増しましたので、採つた方針であり、又、一般に大に觀迎せられつつあります。

“そんなら、なにも、2月の天象を載せてゐる號を、物ずきに、一月號と呼ぶ必要が無いではないか?! 3月の天象を載せてゐるものは、つまり、三月號ぢやないか?”といふ聲が最近、諸方から聞えて來ました。實際、その通り、こだはる必要は無いのです。そこで、こうした内容と號數の調整、其の他、ついでに此の際、いろいろの改良を施し、雑誌の面目を一新しようといふことになりました。そして、今後、大體、次ぎのやうに編輯することに決定しました。ダブル・ナンバを一回だけ作るのは、奇數號に奇數月を、偶數號に偶數月をといふ本誌の永い傳統を便利なものとして繼承するためです。

第20巻	第230號	1940年	“六月號”	五月25日發行	七月の天象所載
“	第231號	“	“七月號”	六月25日	“ 八月の天象
“	第232號	“	“八月號”	八月1日	“ 九月の天象
“	第233號	“	“九月號”	九月1日	“ 十月の天象
“	第234號	“	“十月、十一月、十二月號”	十月1日	“ 十一月と十二月の天象所載
第21巻	第235號	1941年	“一月號”	十二月1日	一月の天象所載
“	第236號	“	“二月號”	一月1日	“ 二月の天象

何だか、號數から見ると、二ヶ月もごまかしたやうに見えますが、よく見て頂けば、決して其んなものではありません。第234號が倍大號となつてゐるのと“一月號”や“二月號”が今までより1ヶ月早く發行されてゐるのが、改められる點です。會員たちに何の御迷惑をかけてゐないトリックを御覽下さい。發行日を4—5日變へたのは、名目上、2ヶ月も以前に發行される形式を一寸改めただけです。

(第240頁より)

以前よく、この時計は何回修理してある等といふことを聞きましたが、それは胴と蓋との合符號として側に刻まれてある線の數を見て修理毎に刻まれたものだといふことなのですが、全く妙な宣傳をしたものです。最近かかる愚を耳にせぬことは科學日本人の一面目とも言ひ得ませう。一昨年元旦から滿洲も中央標準時に歩調を合すことになりましたが、これは明治9年秋頃から東經135度の子午線の「時」を標準時とし、日本全國一般に、この時制によることにされたもので、これと今一つ東經120度の子午線上の「時」を西部標準時とし、明治29年1月1日から臺灣地方一帯において使用することになつたのです。又、緯度の高くなるに従つて時計の振子の振り方が速くなり、時間が進むものだといふことを知つておいて戴きたい。赤道附近では緯度1度變つたために、振子の受ける影響は24時間に付1秒弱から4秒強迄ですが、我國の主要區間の例を挙げますと、東京長崎間(差2度56分)=24時間に付10秒、東京函館間(差6度7分)=24時間に付24秒。

その他、夏と冬とで時間が狂ふといふことを聞きますが、これは天府輪を單一の金屬で作りますと、溫度が昇れば膨脹して直徑が大になり、従つて週期が大きくなり、時計が遅れ、溫度が降つた時には、その反對に進みます。例へば夏と冬とで溫度の差攝氏25度とすれば、夏において正しく合つてゐた時計は、冬になると1日に6分以上も進むこととなります。かやうな溫度による變化を消却するために、所謂切り天府なるものが工夫されたのであります。最後に時報について一言、郵便局と鐵道は從來毎日(日曜、祭日を除く)正午3分前に電鈴がなり始め、正午に東京天文臺で自働報時機へ通ずる電線を斷つと全國一齊に電鈴が止む。この時が正午ですから、正確に時計を合はせようとするには、その電信係に行つてこの電鈴を聞くことでしたが、ラヂオの出現以來これを家庭に送つてくれて、ゐながらにして聞き得るやうになりました。随つて現在ではラヂオの正午の時報を最も正確なものとして承知されることです。電話での時報で何秒といふ正確さをテストしようとする人が往々ありますが、概略の時報以外には役立たぬものであります。